

講演要旨

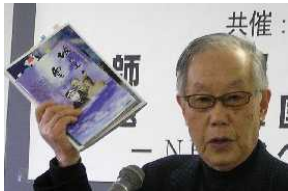
「韓国併合百年」とどう向き合うか

NHKスペシャルドラマ『坂の上の雲』を問う

《講師》 中塚 明さん(奈良女子大学名誉教授)

大学人9条の会(富山)主催(憲法9条の会 in とやま・日本国憲法をまもる富山の会共催)で11月3日、標題の講演会が富山県民会館で開かれ、約80人が聴講し、司馬遼太郎の長編小説『坂の上の雲』をつらめく韓国を無視した歴史観とNHKのドラマ上映の意図に対する認識を新たにしました。(文責:柴田健次郎)

NHK『坂の上の雲』放映の狙い



共催：
来年2010年は韓国併合100年にあたる。韓国にとっては国恥100年である。これをどう考えるか、日本人として否応なしに問われる。このとき、

NHKがスペシャルドラマ『坂の上の雲』を11月29日から3年かけて13回にわけて放映する。

この小説は40年前、5年に及び産経新聞夕刊に連載され、発行部数2000万部を超える国民的なベストセラーとなり、司馬遼太郎の代表作となった。日本が世界の大国ロシアに勝った日露戦争が主題で、いわば明治の「成功物語」である。生前、司馬は戦争の場面が多いので作品が映像化されることを嫌っていた。しかし、2001年NHKは映像化の許可を得て、司馬の意に反して敢えて映像化した。NHKは、「21世紀を生きようとする日本人にとって、同じように新しい価値観を作り出さそうとした明治は大きなヒントを与える」と企画の意図を述べている。

司馬遼太郎の朝鮮観

司馬は日本の近代をどうみていたか。彼は1923年戦車兵としてノモンハンで戦いソ連に敗れ、昭和の戦争はくだらないと実感した。それにくらべ日清・日露はいい時代で、昭和は本来の日本ではない、三代目が台無しにした、と考えた。大岡昇平などもこれに近い考えを持っていた。

明治維新(1868年)から40年足らずで日露戦争に勝って1910年に韓国を併合した。日本の近代化は朝鮮を犠牲にしながら進み、日本の勃興は朝鮮の没落と平行する。司馬の朝鮮観は次の3点に要約できる。朝鮮人には罪はなく悪いのは地理的位置でロシアと日本にかこまれている。李王朝500年の末、停滞し朝鮮は国力が衰えている。大国がしのぎを削る帝国主義時代にあつて日本の支配下に入るのを甘受せざるを得なかった。司馬は、これによって日本が朝鮮を侵略したことを書かずにすました。

恥ずべき卑劣で暴虐な日本政府の行為

日清・日露戦争につながる明治8年(1875年)

の日本の挑発による江華島事件にはじまって、日本は世界に公表できない卑劣で暴虐な行為を繰り返してきた。今、それを明らかにしようではないか。王宮を占領し王をとりこにし、戦争の名分をつくるために、清国を追い出せと朝鮮政府に要求し、最初の抗日運動である東学党蜂起で数万人の農民を皆殺しにし、王宮のクーデターとみせかけて寝室にまで闖入して朝鮮王妃閔妃を惨殺したなどなど。司馬はこれらを全然書かなかった。

日本人の多くはこういう事実を知らない。日本の暴走は明治のはじめ、日清戦争のときからはじまっていた。韓国併合100年にあたり、過去を見つめ、将来、東アジアの諸国とどのように協力するのか、日本人として真剣に考えるべきとき、NHKはこれに水をかけるかのように『坂の上の雲』を放映しようとしている。日本の外交は国際的に通用しないものだった。このことを再認識しようではないか。

アジア諸国民との真の友好連帯のために

『東亜日報』元社長・権五琦氏は、日本人はなぜ100年前にさかのぼって考えないのか、東学党の蜂起は社会変革のプログラムを持っていた、国を変えようというエネルギーはあった、日本はこれを押しつぶしたと述べている。氏は日本の近代化について、朝鮮の不幸の上に自国の安全を確保した国はやがてはつぶれると訴えたかっただけではないか。

また、明治初期、田山正中は「征韓論批判」のなかで、朝鮮を占領した日本は、周りを全部敵にする状態になるとし、朝鮮は独自の民族的なものをもっていると述べた。こういう視点からわれわれの朝鮮観を見直すことが大切ではないか。林東源氏は北から南に逃れ北朝鮮の専門家になり南北共同会談の道筋をつけた人物だが、南北が統一のために熱心に努力していると『回顧録』(岩波書店刊)で語っている。しかし、日本のマスコミは表面的なことしか書かない。

いま、NHKはドラマ『坂の上の雲』の放映を通して「歴史の偽造」をやろうとしている。この際、事実をしっかりと知り、アジア諸国民との真の友好連帯をめざそうではないか。